

白井市総合教育会議録

○会議日程

令和3年10月5日（火）

白井市役所東庁舎3階会議室302・303

1. 開会
 2. 市長挨拶
 3. 意見交換
 - (1) 「スクールサミット」での子どもたちのプレゼンについて
 - (2) 「キャリア教育」の推進について
 - (3) 「子どもの貧困（ヤングケアラー）」について
 4. その他
-

○出席委員等

教育長	井上 功
教育委員	川嶋 之絵
教育委員	齊藤 豊
教育委員	中里 敏康
教育委員	松田 加奈子

○欠席委員等

なし

○出席職員

市 長	笠井 喜久雄
企画政策課長	池内 一成
企画政策課	武藤 宏明
教育部長	和地 滋巳
教育部参事	本間 賢一
教育総務課長	金井 早苗
生涯学習課長	寺田 豊
文化センター長	石田 昌弘
書 記	山本 麻奈美
書 記	鈴木 美菜

午後3時00分 開 会

○事務局 それでは、定刻となりましたので、ただいまより令和3年度第1回白井市総合教育会議を開催いたします。

開会に当たりまして、笠井市長より御挨拶をお願いいたします。

○笠井市長 皆さんこんにちは。市長の笠井です。

今日は新しい委員さんも加わり初めてということで、今、私が教育について何を考え、どういう方向に進むかということをし時間を頂いて、皆さんに話をさせていただきたいと思います。

教育長がパワーポイントを使って話をすることですが、私はアナログですので、黒板に話をしたいこと書きましたので、よろしくお願ひしたいと思います。

皆さんには、定例の教育委員会議に引き続いて、この総合会議に出席をしていただきまして、ありがとうございます。また、井上教育長をはじめ、各委員の皆さんには、日頃より教育行政に御尽力を賜りまして、この場を借りて御礼申し上げます。

それでは、市長として、教育現場も含めてどういうことを考えているかについて、お話をさせていただきます。暑いので、上着を脱がさせていただきます。

今一番関心があるのは、コロナの関係だと思います。コロナの感染状況についてお話をさせていただきます。今現在、累計で753人の方の感染が確認されています。ほとんどの方がもう症状がなくて、退院されていますが、累計でいきますと753人。そして、第5波と言われている8月に入って、8月が253人、9月に入りまして60人の感染者が確認されています。10月に入って、昨日までですが、1人の方の感染が確認されています。

第5波と言われている8月がピークになって、だんだん感染者が減っている状況にあります。これは、全国的にも、千葉県でも同じような傾向になっています。

なぜ減ったかというのがなかなか詳しい根拠がないのですが、一つはワクチンの接種率が向上したことと、人々の人流が抑制されている。あと、感染予防対策が徹底されている。こういうことが言われています。

そして、この緊急事態宣言が始まった8月2日からの感染状況を見ますと、10歳以下が全体の24.1%。4人に1人は、10歳以下の方の感染が確認されておりました。でも、今ここにきて保育園や幼稚園、小学校で感染者が出たという話は聞いておりません。ですから、このまま引き続き感染予防対策の徹底をしていきたいと思っています。

次に、市で何を今までやってきたかということをし紹介させていただきます。

例えば学校で子供に感染者が出た場合、まず保健所で感染ルート、感染者を特定します。でも、それではなかなか見落としがあるということで、市では同じ空間にいた子供たち、先生、そういう方を対象に、希望者に対して市の独自のPCR検査を無料で行って来ました。今でも行っています。ですから、子供に感染者が出た場合は、希望する関係者は、市のPCR検査を行っています。

あとは、PCR検査の助成。これも行っております。保育園、小学校、小中学校の先生、この方がPCRを希望する場合、年2回まで助成を行っている。この事業も継続して行っています。

さらには、8月にかけて、小中学校、保育園、ソーシャルワーカーと言われている人たちで市内で働いている人たち全ての方に、ワクチン接種の先行予約をさせていただきました。大体約9割の方のワクチン接種が済んでいます。ですから、夏休み中、新学期が始まる前に、先生方はワクチン接種を行っているというところでは。

さらには、学校における感染予防対策の徹底ということで、消毒などをやっていただく方を先生の負担を軽減するためをお願いをして、今、対応しているところでは。

ですから、自分なりには今できることの対策というのは、小中学校、保育園、そして、あとは高齢者施設等には、市として独自に対策を行っているところでもあります。

その結果、皆さんも知っていると思うのですが、ワクチン接種の現状について、ちょっとお話をさせていただきます。

白井市はワクチン接種がスムーズに進んでいまして、これは医療機関の皆さんと市民の皆さんの協力によるものと思っております。今現在、1回目が12歳以上の対象者で78%終わっています。2回目が68.6%ですから、今週中には、早ければ2回目の接種が70%を超えるというふうに私は予想しています。

この中でも、12歳以上の方の接種がちょっと遅れています。それは、クーポン券を発送したのが9月の15日ですから、ちょっと出足が遅れましたので、今、大体10%以下だと思います。ですから、クーポン券が届き次第、もう予約ができますので、希望者においては、早い方では10月中に終わるように今進めているところであります。

このコロナを受けて私が感じたことは、コロナで命を無くすこともそうなのですが、日本の、世界の社会構造が変わってきたのではないかと感じております。

それは何かと言いますと、今まで例えば学校現場でしたら、対面の教育というものが当たり前でできてきました。しかし、コロナによって、なかなか対面教育ができなくなってきた。場合によっては、リモートでやるようになってきました。これがいいか悪いかは今後のことですが、そういうふうなことに少しずつ教育現場も変わりつつあります。

そして、何よりも危惧したのは、地域社会のコミュニティが壊れてきているのではないかと感じております。今までは対面しながら、その顔色を見ながら、それぞれの人のことを理解してきた。しかし、ここにきて、なかなか会えない、そのストレス。その結果、SNSやそういうところで誹謗中傷が始まる。こういうことが社会で起きているのではないかと感じております。

ですから、私は、もう一度地域社会、思いやりがある、人が人を支える、こういう社会をこれからもう一度再生しなければいけないというふうに感じております。これが、コロナで私が思った大きな課題です。

もう一つは、承知のとおり、八街の児童の5人の交通事故であります。

6月の28日、飲酒運転が原因による5人の子供たちの死傷事件がありました。これは非常にショッキングな出来事です。子供の命、市民の命もそうですが、命を守ることの大切さ、交通安全対策の重要性を改めて痛感し学ばせていただきました。

その結果、市では8月中に、すぐできることの対策をとっております。さらに、今議会で2回の補正予算を組みました。1回目と、さらに最終日に2回目の補正予算を組んで、今できる、今やらなければいけない対策を進めているところです。

ただ、これだけでは十分とは言えませんが、今やらなければいけないことについては、私は予算を投入していきたいというふうに思っております。

4番目が大津の事件です。8月に17歳の兄が6歳の妹を虐待というか、殺害した事件がありました。これも今日テーマにあります。17歳のお兄ちゃんが6歳の子の面倒を見ている。こういうことが起きているという、非常にこれも私の中ではショッキングでした。

これはコロナの影響なのか、いろいろな要因があると思います。ですが、確実に言えることは、コロナを含めて、今、日本の国の中で格差というのが広まっていることを私は感じております。今後は、その格差という問題をどう行政として、白井市として取り組んでいくかということが大事なこと

だというふうに考えています。

最後に5番目が、2050年のカーボンニュートラル宣言。これは菅前総理が宣言をして、今、取り組んでおります。この話も、一番初めのスクールサミットで話があります。これも大事なことです。

地球温暖化を見てください。この10月に入って、こんな暑い日が続くことが起きる。さらには台風、いろいろな災害があります。これからの子供たちというのは、この対策を取り組まなければいけません。当然、私たち現役世代についても、この問題については、直視をしていかなければいけないというふうに感じています。

そして、私は、新年度予算をつくるときに職員に指示をしたのは、まずは命。これは子供だけではありません。子供から高齢者、障がい者の方も含めて、命を守る対策を最優先で進めていただきたいと。その上で、先ほど言いましたが、コロナの影響で経済、生活が非常に格差が出てきている。この問題に取り組んでほしいということで、これは各担当部長に予算編成のときに話をさせていただきました。

これが今、現実には起きている課題に対して、市長として今後どう進めていきたいかということで皆さんに話をさせていただきました。

そして、今日の会議ですが、非常にいいテーマです。

1点目がスクールサミット。これは、地球温暖化も含めたカーボンニュートラルの話も子供たちから本当にいい意見がたくさん出ました。この意見というのは、これからつくる計画や事業に生かせるというふうに考えています。

2点目がキャリア教育ですね。これも白井市は、昔から子供たちに教育体験というのをやっています。これも非常に大事なことです。これから子供が大人に成長する中で、実際に働いているいろいろなことを経験、体験できる、貴重なことです。

3点目がヤングケアラーという、新しいというか、従来もあったと思うのですが、この話について、率直に皆さんに意見交換をしていただきたいと思います。

日々、日本社会、世界も含めて、いろいろな課題が出てきます。その都度、やはり委員の皆さんといろいろな現場の意見も含めて、いい方向に導いていただければというふうに思っておりますので、今日は、初めての委員さんがいますが、率直な意見を聞かせてほしいです。傍聴者が確かに多いですが、それは気にしないで、日頃、自分たちが思っていることを堂々と自信を持って話していただきたいと思っております。

今日は、私は本当に新しい方々の意見を非常に楽しみにしています。どういうことを考えて、どういうことを行政に望むのか。そして、学校現場にどういうことをしてほしいのか。さらには、保護者の立場として、どういうことをしたいのか。こういうことを確認というか、意見を聞きたいと思いません。今日は、よろしくをお願いします。

以上です。

○事務局 ありがとうございます。

それでは、これから会議に入ります。

本日の会議は、笠井市長、井上教育長、また、教育委員4名の出席をいただいております。進行につきましては、前回の会議の際に主催者である笠井市長から、会議を円滑に進行するため、井上教育

長を進行役として指名させていただきましたので、本日の会議も同様に、井上教育長に進行をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○井上教育長 それでは、教育長の井上です。どうぞよろしくお願いいたします。

○笠井市長 お願いいたします。

○井上教育長 私は、マイクのハウリング防止のため地声でやりますので、大丈夫でしょうか。頑張って大きな声でやりたいと思います。

総合教育会議では、教育に関するテーマを市長と教育委員で意見交換をし、教育委員会、市長部局、共通の認識を持つということで、年に1、2回開催をしています。

今回のテーマですけれども、三つ設定されています。

一つ目は、夏休み中に行われたスクールサミット。

二つ目は、キャリア教育。

三つ目は、子どもの貧困（ヤングケアラー）。

この2番と3番につきましては、千葉県の総合教育会議でテーマになったものと同じでございます。

まず、1番目のスクールサミットについて、意見交換をしていきたいと思いますが、この模様は一ばんねっとで撮影をしていただいて、短くまとめたものがありますので、まずその様子を御覧いただきたいと思います。

（00:26:20～00:31:40 動画視聴）

○ナレーター 8月26日、白井市のなし坊ホールでスクールサミットが行われました。これは、白井市市制施行20周年記念事業の一環として、今年度から行われる新たな事業です。初めに、笠井白井市長から挨拶があり、「これからの将来は地球温暖化やコロナ禍など、様々な課題があります。明るい未来を築けるよう、皆さんで協力していきましょう。」と今後の抱負を力強く述べました。

○笠井市長 暗い話ばかりではございません。明るい未来を若い皆さんと力と、そして一緒に協力をして、少しでもいい社会や、いいまちづくりを築いていきたいと思います。

○ナレーター さて、スクールサミットは3部制で行われ、第1部では、中学生によるプレゼンが行われました。

これは、市内の小中学生によるスピーチ能力やプレゼン能力の向上をはじめ、他校の考えを聞き有意義な情報交換をしていこうと、市内全小中学校の代表児童・生徒らの参加がありました。

今回のテーマは「SDGsなふるさと白井」。SDGsとは、2030年までに持続可能でより良い世界を目指す国際目標です。また、地球上の誰一人取り残さないことを誓っており、日本としても積極的に取り組んでいます。

現在抱える白井の現状や、将来の白井を見据えた課題や提案、学校生活でのSDGsとのつながりを紹介するなど、中学生ならではの視点で発表がありました。

第2部からは、小学生による発表が行われました。

最初は少し緊張していた児童も、次第に慣れてきたようで質の高い発表が行われました。

発表するテーマも、「パートナーシップ」や「白井の梨ブランド化」など様々で、この日のために努力してきた成果を元気よく披露しました。

○大山口小学校児童 これから大山口小学校の発表を始めます。

今は、住宅やいろいろな施設などのために新しい土地をつくり続けている状態です。その影響で森林などが減ってきています。これ以上、自然を減らさないためには、SDGsの15番にもあるように、陸の豊かさを守る必要があります。使われていない土地を活用したり、自然保護の重要性をみんなが知っていくことが大切だと思います。

○ナレーター また、途中には、白井市教育委員会井上教育長より講評があり、児童らの発表に対し、「教育委員会として皆さんの特色ある観点を参考にし、その実現に向け頑張っていきたいと思います。」と感謝の気持ちを述べました。

○南山小学校児童 こんにちは。これから、南山小学校の発表を始めます。

○児童生徒A 身近なところでは、作る責任、使う責任について、何があると思いますか。それは、家庭から出る食品ロスというものです。

食品ロスを知っていますか。食品ロスとは、まだ食べられるのに捨てられる食べ物、食べ残し、賞味期限切れで捨てられるなどのことを言います。もったいないですよ。

市内では、たくさんの給食が作られています。そのたくさんの給食に捨てられるはずだった食材を活用できれば、大きな効果を得られるのではないのでしょうか。

○ナレーター この日は、新型コロナウイルス感染拡大による影響で、来場者は限られていましたが、会場からは大きな拍手が送られました。

○児童生徒B すごく緊張したんですけど、すごく楽しんで自分の考えを発表することができました。

○児童生徒C 今後の白井市について深く考えることができ、とてもよい経験になりました。

○児童生徒D 少し緊張したけど、いろいろな話を聞けたし、いろいろな情報とかも交換できたりしたので、とてもよかったです。

○児童生徒E ちょっとだけ緊張したんですけど、緊張感よりも達成感のほうが大きかったので、やれてよかったです。

○児童生徒F 自分でできるようなことなどをいろんな学校から発表してもらったんで、そのようなことを生かして生活していきたい。

○井上教育長 残念ながら多くの人に見ていただくことはできなかつたのですが、何とか開催することができました。

ただいまのテーマにつきましては、このお配りしたパンフレットの中に14校のそれぞれのテーマが書かれています。

それでは、まず1番目として、このスクールサミットのそれぞれの子供たちが考えたテーマの中身、もしくはこのイベントをできれば来年度以降も続けていきたいとは思っているのですが、それについて御意見等があれば、自由に発言していただきたいと思っています。

川嶋委員は撮影も手伝っていただきまして、ずっと見ていただいたと思うのですが、感想等があればお願いします。

○川嶋委員 私自身も、このスクールサミットは今に始まった話ではなくて、教育委員会のほうでやりたいねという話はあったことだったので、すごく私自身も期待があったのでお手伝いさせていただきますということで、させていただきました。

子供たちの発表を見ていて一番思ったのが、支給していただいて間もないタブレットの機器をあんなふうに巧みに小学生でも使いこなせるのかということが、まず率直な感想で、やはり予算割いていただいて、早く手配していただいて、その成果というか、そういう部分ではお見せできたことは、とてもよかったのではないかなと思ったのですが、今回は、本当にごく限られた方での発表ということだったので、この白井市のスクールサミットの取り組みというのを今後も続けていきたいですし、またこれを市のPRといいますか、白井市の教育のPRとしても、もう少し市外の方にも見ていただけるように、何かそういうような機会があったら、とてもうれしいかなと思いました。

以上です。

○井上教育長 中里委員も大体見ていただいたんですかね。どうでしょうか。

○中里委員 私は、前回の教育委員会議でも述べさせてもらったのですが、どうしても子供たちの夢って、素晴らしいことばかりで、小学生でも中学生でも。でも、大人って、それを聞いて、ああ、すごいねって思うのだけれども、じゃあ実際やりましょう、やってくださいとなると、これだけ経費かかるからと言って、頭ごなしでもうやめてしまう。

子供たちは、今回のこの課題に対して、一から自分たちで発案して、どうやって組み立てるかというのを全部自分たちで。まず夢を持って、それについてどうやって実現させていくか。自分にはこれができる。でも、これはできないのは、また違う子ができるという、そうやってみんなで何かしら協力、力を出し合ってやっていけるっていうのは、頭ごなしに、これはいい、これは駄目という大人の気持ちだけじゃなくて、私たちもその気持ちを忘れずに進んでいったほうがいいのかと思いました。

それと、2点目が、大人ってどうしても、例えば、健常者として障がいのある人やジェンダーの人を見ると、やっぱり引いて見てしまうという部分があるのですけれども、子供たちって、ふだんの学校教育の中でもあると思うのですけれども、すごい身近に現実としてそれを受け止めていて、逆に心の中で差別してしまっているのは、大人のほうかなと。だから、もっとそういうわだかまりがない空間、例えばヨーロッパのほうであれば、重度の障がいのある子と普通の生徒と一緒に、普通の学校でやっていけるという制度も、学校によってはあるのですけれども、そこまでいかなくとも、もっとお互いに近寄って暮らせる環境という方向というのも欲しいかなと思いました。

あと、これは、ちょっと笑い話にもなるのですけれども、子供たち、本当にどこの学校でも、梨に対して愛情を持っているので、どこの学校か忘れましたが、子供たちが掲げた梨パークというのを、白井市はもっと長いスパンで計画してもいいのではないかなと思いました。

以上です。

○井上教育長 ありがとうございます。

子供たちのこの純粋な夢とか希望を実現となると、大人がストップしてしまうようなところもなきにしもあらずというのが中里さんのお話だったかと思うのですが、市長、いかがですか。

○笠井市長 この事業を非常に私はいいと思っています。なぜかというと、白井市は市民参加を標榜しています。当然、市民参加条例もあるわけですが、この参加している人たちというのが、今ほとんど同じ人たちが参加をしている状況であります。私は市民参加というのは、子供からいろいろな層の人たちが自分に関係する施策、自分に関係する事業について意見を言う。それを広めていきたいと思いますので、そういう意味からすると、このスクールサミットの方向性は非常に共感できます。さら

に、今、どう実現するかの話ですよ。

これをもたらしたときに、今、市が基本計画を進めている中で、今後、事業着手できるとか、そういう方向性についても考えてほしいということで、このDVDについては、後ほど職員が見られるように配ろうと思っています。ただ言うだけではなくて、子供たちに思ってもらいたいのは、自分たちが熱意を持って行動すれば、何か実現できるということの体験談も、これからはつくっていきたいと思っています。

以上です。

○井上教育長 ありがとうございます。

今ありましたけれども、DVDは全部で8時間ぐらいになりますかね。DVD3枚に撮っていただいておりますので、これは希望があれば、どちらにでもお貸しできます。傍聴の方も興味があれば、これは貸出しすることができる状況になっております。先週ぐらいかな、学校にも配布しています。市長のお話のなかで、職員にも見ていただきたいというのは大変ありがたい話だなと思います。

以前から私は、子供が大きいステージでプレゼンテーションをやる場があるといいなという希望と、市長は、子供の白井市に対する思いを聞いてみたいというのがありまして、教育委員会として検討した結果、このような形になりました。

齊藤さん、いかがですか。

○齊藤委員 私は、この日は仕事で参加できなかったのですが、今ビデオを見て、内容がとにかく自分の小学校、中学校と重ね合ったときに、素晴らしい児童生徒たちがすごく白井市の中で育っているなど。これは本当に教育関係の先生方、教育委員会の毎日の努力だなというのは、本当に思いました。

それと、SDGsですか。テーマもすごくいいなと思ったんです。それはなぜかといいますと、今まさに市長のさきほどの話ではないのですが、地球温暖化が進んでいる中で、どれだけ無駄なものを省いて、今後、2030年までにというのを掲げている中でこのようなスクールサミット、子供たちの発表の場でこういうことをやるという。

例えば、ビデオの中にも出ていましたけれども、給食の残りが捨てられている。これがもったいない。市として、どうすればいいんですかという提案をされているところとかは、まさに小学生、中学生が真剣に考えて、こういうことを組んでやっているのだなというのは本当に分かりました。

また、これをやることによって、今、工夫も大事なのですが、どうしても人間というのは、どんどん楽すれば楽しく生きていく生き物だと思うのです。例えば、歩くより自転車のほうが、自転車より車のほうが、車に乗れば、エアコンをかけて涼しくして、冬は暖かくして。そういうようにするよりも、歩いて駅まで行って電車に乗ったりとか。そういう一人一人の行動が、今後SDGsの役に立っていくのかなというのを含めて、今後もこういうことをずっと子供たちにやってもらえれば、また、白井市の中でも発展した未来の財産が育っていくのではないかなと思います。

○井上教育長 ありがとうございます。

先ほど市長からは、職員のほうにも広げていきたいという話。企画政策課の池内課長。子供たちの様子、この内容等を見て、どうですか。

○池内企画政策課長 SDGsは、今はもう世界標準になっている課題というか、テーマですけど

も、市のほうも今、教育をはじめ、様々な分野の計画をつくっております。

その中で、遅ればせながら、このSDGsの17の目標ですか。こちらのほうを計画の中に分かりやすい表現で取り入れていきたいと思いますということですね、今。方針というものは市で定めてはいないのですけれども、各課のほうに呼びかけは行っております。率直な感想でいきますと、子供たちにちょっと先を越された思いはございます。

○井上教育長 ありがとうございます。

中学生はもちろん、小学生もタブレットを使って、かなり高いプレゼンテーションを作り上げています。今日、初めて松田委員は御覧になったかとは思いますが、どうでしょうか。

○松田委員 私、実際、小学生の子供がいますので、なかなかSDGs17のゴールって、大人でも把握していないし、意識していないと思うのですけれども、今、話題になっている中で、例えば食品の問題ですとか、パートナーシップというのを一つのゴールに注目して、子供たちが深掘りして、あれだけのプレゼン、また、あのステージの上でやっているというのは、本当に素晴らしいなと思いました。

ぜひぜひ親も見たいというか、DVDを貸していただきたいと思って。ダイジェスト版ではなく発表を全て見たいなど。すごく興味があります。

○井上教育長 ありがとうございます。

今、かなり多くの学校が家にタブレットを持ち帰らせていると思うのですけれども。どうですか、お子さん、持ち帰って使っていますか。

○松田委員 はい。早速、夏休みからタブレットの宿題も出て、やっぱりそっちのほうから終わらせようとか。子供は早いですね、何でも。親の心配もなく。こうやるんだよと逆に教わる人が多いくらいです。

○井上教育長 ありがとうございます。

○笠井市長 自分もスクールサミットを聞いていて、子供たちの話の中で人権の話は日本の豊かさ、国際社会における格差から生じる諸問題に、子供の感性で発表があったのは非常に感動したし、感銘しました。これからどんどん、日本の中でも格差があるけれども、国同士でも格差が広がっていく中で、彼らがこれから大きくなったときに、この問題を直視しなくてはいけないので、小さいときから意識するということが、非常に大事だなと思いました。

○井上教育長 ありがとうございます。

では、このテーマの最後に、来年度以降もこのステージを使ってやっていきたいなと思っているのですけれども、舞台を大きく使ってという感じでは、石田文化センター長、あのステージの使い方というのは、いかがでしょうか。

○石田文化センター長 今回、看板系、それからスクリーンとか発表用の机の配置というのは、照明を工夫したのですけれども、いい状態であったのではないかなと思います。

○井上教育長 ありがとうございます。

それでは、このテーマにつきまして、ほかにございますか。よろしいですか。

〔「なし」と言う者あり〕

○笠井市長 ということは、次年度もこの事業は、皆さんは継続ということによろしいのですね。

○井上教育長 よろしいでしょうか。

○笠井市長 はい。

○井上教育長 できれば、コロナじゃなければ観客は入れたいなどは思っています。

○笠井市長 そうですね。できれば多くの方に聞いていただくような工夫も、これからしていきたいと思えます。

○井上教育長 ありがとうございます。

それでは、テーマの2番になるのですけれども、キャリア教育についてです。これについて、私のほうから少し説明させていただきます。

これは、先ほどお話ししたとおり、千葉県の総合教育会議のテーマでもあったわけですが、キャリア教育は、社会的・職業的自立に向け、その基盤となる能力や態度を育てるという目的の下、やってきているのですけれども、白井市の学校としては、中学2年生のときに職業体験と立春式、この二つを白井市のキャリア教育の柱として進めております。

立春式はおそらく、白井出身の方々は中学生の時に皆さん経験していると思います。立春式の前に職業体験を行い、その職業体験の感想や体験談を立春式で発表して、大人になるぞという自覚を持つきっかけとして実施しています。御存じのとおり、コロナによって2年間、職業体験も立春式も中止になっています。

仮に、コロナが終わったとしても、今まで開拓した職場、いろいろな事業者の方に、また来年から職業体験をお願いしたときに、スムーズに行くかどうかという心配があるのですね。ですので、この白井市のキャリア教育となったときに、今後どうしていけばいいのかというのを今、特に中学校を中心に模索しているところではあるのですね。このようなことを含めて、御意見をいただければと思います。

齊藤委員は、多分立春式をやってこられている方だと。

○齊藤委員 そうですね。私は、元々白井にずっと住んでいましたので、白井中の時代には、私自身も立春式には参加させていただきました。そのときに職業体験というの、やっぱり一緒にやりました。

これ、ずっと長い歴史がある、特に白井市は、かなり歴史のある立春式ですので、できれば今後もこういう形をとっていただければと思うのですけれども、今、教育長からもお話がありましたが、コロナで2年間できない状況で、職業体験というの、事業者側もなかなか難しいというのがあるということを聞いています。

ただ、何かそういう方向の、どうしても歴史を紐解くと、千何百年前の話ですかね。大人になるという儀式ですので。何かそういったことで、この中学2年生、元服というのですかね、14歳のときに大人の仲間入りという儀式ですので、いろいろ知恵を出して、コロナが明けたあかつきには、再開。何か違う方向でもいいので、再開する。そういった大人たちが知恵を出し合って、やっていければと思います。根本的にどうするんだという答えにはならないのですけれども、職業体験って本当にすごくいい体験なので。

私は、子供が通っていた学校は桜台中学校だったので、桜台中学校は、2年生ではないのですが、働いているお父さんの仕事を生徒たちに発表する場というのがありました。あと、大山口小でも同じような話を、親たちを呼んで、子供たちに、こういう仕事があるんだ、ああいう仕事があるんだという。体験に行くのではなくて、体験を話すような、そういった事業をやっていたいてい

たので、そういった形とかも含めながら、いろいろないい方向で持っていければと思います。

○井上教育長 ありがとうございます。

考え方としては、職業体験イコール、キャリア教育。言い方は悪いのですが、職業体験をさせておけば、キャリア教育をやっているということでは駄目だろうという意見もあります。なので、もっと大きな意味で、人生をどう設計するかとか、そのようなことを考えさせる必要がキャリア教育にあるのではないかというようなことも言われています。

中里委員、どうですか。

○中里委員 ほとんど齊藤委員と同じような意見なのですが。私自身も、職業体験も立春式も経験しまして、これからも必要と考えるほうなのですが、

例えば、職業体験を2年間やってこなかったのが、それを引き受けてくれる事業所さんが、こんな状態だから難しいとか、それはいっぱいあると思うのです。それは、手法の取り方であって、例えば、学校側がこれだけを用意しました。そのうちどれか好きなのを選んでくださいとか。逆に、多分、梨体験を第二小さんとか何校かやっていると思うのですが、それのもっと大きなバージョンで、丸一日梨屋さんで。それを、年に1回ではなくて、梨屋さんの邪魔にならないのは前提なのですが、その剪定の時期とか、摘果の時期とかいろいろあると思うので、それで年4回ぐらいの経験をさせてみるとかというのもいいのではないかなと思います。

それと、どうしても中学生の頃って、俗に言う反抗期というの也被れてくると思うのですが、反抗期も大人になる、最近の子はあまりないと言いますが、心の中では絶対持っているのです。そういう中で、自分の親が外で働いている姿は見られない。でも、家に帰ってきたら、例えば酔いつぶれているとか、日曜日だらだらしている。だから、僕は、私は大人になりたくない。心の中で大人になる段階での反抗をしてしまうという流れがあると思うのですが、それを自分が好きだろうが好きでもないだろうが、親とはまた違う職種で、大人たちはこういうふうに働いているんだよという姿を見せつつ、その経験をさせることで、子供は、親ではちょっと理解しづらけれども、違う大人を見て、こうやって大人でも大変なんだとか、こういう部分は私でもできるという希望とかということで、成長段階で必要なものだと思います。ちょっとまとまりませんが。

○井上教育長 ありがとうございます。

立春式は補助金をいただいている事業で、主に職業体験のときの子供たちの保険に使っている。あとは、立春式の際に使っている。それを所轄しているのは生涯学習課ですが、この立春式のことについて何か話し合われたりとかというのは、あるのですか。分かる範囲で結構です。

○寺田生涯学習課長 立春式につきましては、先生方に集まっていただいて、どういう形でやるかというお話をさせてもらっています。補助対象になるのは、自然体験だとか職業体験とかボランティア体験などをしていただいたことに対する謝礼だったりとか、それにかかる経費みたいなのは、補助の対象とはしてあります。

実際に言えることは、学校にお任せしているというところが実態ではございますので、一つ一つの事業については、こちらで今、御説明はできないところではあります。

○井上教育長 ということは、まだ今後のことについて話し合われているということは、今はないということですね。

○寺田生涯学習課長 そうですね。その年その年の事業内容について話し合いをしていますけれど

も、今後について、どうだという話はないです。

○井上教育長 今後、どうしていくかというのは、なかなか難しい問題ではあるのですが。

松田委員はいかがですか。このキャリア教育については。

○松田委員 職業体験というのは、実際に中学生が、例えば接客などを実際にやるということですかね。

○井上教育長 はい。大体2日間やります。

○松田委員 小学校では、まち探検という形で地域のお店を回って質問したり、仕事の大変さとかというのはあるのですが、そういう機会というのは、子供にとってもとても貴重だと思います。いい体験なので、ぜひとも、コロナ禍ということもありますけれども、何かしらそういう経験はさせたいというのは、親の気持ちではあります。

○井上教育長 ありがとうございます。

川嶋委員、いかがですか。

川嶋委員は、お子さん、ちょうど2年生で。残念ながら、中止になってしまった学年ですね。

○川嶋委員 そうなんです。それでも学校側というのは、本当に非常に工夫されていて、保護者の中でお話をしてくださる方はいらっしゃるかと手紙が配られまして、何名かの有志の方とわざわざ平日にお休みを取ってくださって、子供たちに職業のお話をして、質問を受けてというようなコマを、授業をつくってくださっているようなので、学校というのは、いろいろある中で最善の工夫でやってくさっているんだなと思うと、なかなか軽々しく言えるべき話ではないなと思うのですが。この立春式というのは、本当に白井の伝統行事で、そういった観点から見ると、ここでなくなってしまうのはと思いますので、いい形でリニューアルといいますか、継続していけたらいいかなと思います。

あと、職員の負担のところでは言いますと、職業体験の事業者さんとの交渉というのは、恐らく教員の方々がやってくさっているのではないかなと思いますと、その教員の負担というのがものすごく大きなところに、キャリア教育の工夫、大変なのではないかなと思うと、そこをいかに教育委員会なり、カバーし合いながら、もう少し円滑に進めるような新しい形のキャリア教育というのを生み出していく時期に来ているのかなと感じます。

以上です。

○井上教育長 ありがとうございます。

市長は、ちょっと内容は違うのかもしれないのですが、特別授業等もやられて、子供たちのそういう将来とか、職業観みたいなものをお聞きになるところがあるかなと思うのですが、どうですか。

○笠井市長 自分も、このテーマのときに、少しいろいろなものを調べてみたのです。いろいろな事案か事例があるかということ調べてみたら、このキャリア教育って、生きる力を育むということが最大の目的ですので、何かこの中学の時代の体験、経験というのは、私は必要だと思っています。それが職業体験なのか、もっと言うのだったら、例えばまちづくりとか地域づくりに、地域に入っていて、いろいろな課題であるとかボランティアに加わるとか、そういうこともひっくるめた、地域の愛着も含めた生きる力を養っていただければと思っておりました。

○井上教育長 ありがとうございます。

御自分で実際に特別授業をやられて、いろいろな子供たちの反応を聞いたりしている中で、何か思うようなことはありますか。

○笠井市長 毎回、白井の歴史なり、白井のこれからの話をするのですけれども、その中で、子供たちと話をすると、自分も白井のいいところを知らないことがあります。

また、一方では、白井にこういうものを作ってほしいという意見があります。ですから、特別授業では、自分の地域のよさ、まちのよさが分かるし、子供なりにこのまちの課題というのも意見が聞けますので、自分の政策の参考にもなります。

ただ、子供たちには、人がまちづくり、地域づくりをするのではなく、あなたたちが5年後、10年後、このまちに住んでいって、いいまちをつくる、いい地域をつくる、場合によっては、あなたが市長になって、このまちをよくしてほしいという話をさせてもらいますので、自分にとってもいい事業だと思っております。

○井上教育長 ありがとうございます。

多くの方が、職業体験はまず大事であって、その集大成である立春式という形、市ではいい形になっているので、皆さん継続できればという思いが多かった。校長会等には、市長や教育委員の皆さんの考えとして、お伝えしたいと思います。

ただ、長年かけて、事業者との関係ができていっている中で、また2年とか3年、中止になってしまうと、事業者もそれどころではなくなってしまうということもあつたりするので、難しいかなとは思いますが、何とかつなげていければなというふうに思います。

どうですか。キャリア教育につきまして、ほかにございますか。

どうぞ、齊藤委員。

○齊藤委員 今、市長からも特別授業とかキャリア教育の一環だとは思いますが、私も、先ほど、桜台中で特別授業というのを今年で13年ぐらいやっているのですが、思うことは、子供たちって児童生徒のときって、どんな仕事があるか分からないというのが一番大きいと思うのですよ。それを大人たちが教えてやって、どんな仕事、こんな仕事があるんだよというのを教えて、授業として行えると、絶対、子供たちって、私はピアノの先生になるんだとか、医者になるんだとかって決まっている子はいいのですけれども、大半の子は多分、授業をしていると決まっていないうちの子が多い。私自身もそうだったのですけれども、何となく会社に入って、何となく国家試験取って、何となく運転士になってと、そんな感じの。でも気がついたら、専門家になっていたみたいなの。そんな感じなので、あせらなくてもいいんだよというのを大人たちから言ってあげて、こんな職業もあるし、こんな職業もあるんだよ。だから、みんなそれに合った職業が必ずあるから、そういうのを教えてあげると、大人たちがつくるというのは、これからも必要ではないかなと思います。

○井上教育長 ありがとうございます。

桜台中の親父の特別授業は、私が校長だった頃に、大体お父さんが参加していました。あの頃は多分、桜台中だけかな、そういうのをやっていたのは。

○齊藤委員 そうですね。

○井上教育長 今それが桜台中をモデルにして、僕が白井中のときには白井中でもやっていたし、南山中でも、多分、いろいろな学校でもやるようにはなっている感じですね。

桜台では、親父の授業と言っていたのが、女性の方も入るようになったので、名前どうしようかみ

たいな話をしていたときもありましたね。

それでは、キャリア教育についてということですが、ほかにございますか。

〔「なし」と言う者あり〕

○井上教育長 では、次のテーマに移ってよろしいでしょうか。

次は、これも県の総合教育会議で取り上げられた子どもの貧困、ヤングケアラーの話題。

今年の1月29日に放送された読売テレビニュースが短くまとまったがあるので、これを御覧いただきたいと思います。

(01:06:20~01:16:48 動画視聴)

○ナレーター クラスに1人がいるとされるヤングケアラー。

○中学教師(男性) はい、では始めさせていただきます。お願いいたします。

○中学教師(男性) 来てもらえませんかという形で電話をしたのですが、今、体調がちょっと駄目でという形で。

○中学教師(女性) 家のお手伝いとか結構させていて、お料理なんかも上手に作ることもある。

○中学教師(女性) いろいろなことができますよという言い方はするのだけれども、逆の見方をすると、ヤングケアラー的な形で支えているという可能性も。

○中学教師(男性) 本心が本人から聞き取れない。

○ナレーター 家族の介護やケアで、大人が担うはずの重い責任を負う。心の調子が悪くなると家事ができなくなる母親のために。

○女性1 料理を作ったりとか、洗濯をしたりとか、掃除をしたりとか。何で私がこんなに頑張らなきゃいけないんだろうと。

○ナレーター 失った子供としての時間。色濃く残る将来への影響。

○男性1 自分が何とかしなっているのがあったんで。やっぱり自分一人で全部閉じ込めていた。

○男性2 孫がなぜ祖父母の介護するんやと。

○女性2 家族愛というか、家族の中でケアすることが当たり前というのが、まだ風潮として残っていて。

○ナレーター ヤングケアラーたちが直面する現実。あるべき支援の形とは。

○マミ 私、あの辺歩いてたのをちょっと思い出しちゃいました。何か。

○ナレーター 中学生のときから統合失調症の母親のケアをしてきたマミさん、22歳。父親とは幼稚園の頃に別居。毎日のように独り言をつぶやく母親に付き添い、深夜まで梅田を歩き回った。

○マミ 独り言をぶつぶつ言いながら、どなって歩いている母親の隣にいるのもすごく嫌で。やっぱり精神疾患というのは、ほかの人から、すごいじろじろ見られたりして、その視線というのが、何か私にまで来てるような気がして。やっぱりみんなと違うなというのをすごい。みんなと同じことが、なぜできないんだろう。

○ナレーター ヤングケアラーとは、病気や障害のある家族の介護やケアを担い、本来、大人が引き受けるような重い責任を背負う18歳未満の子供たちのことを指す。彼らのケアは、身体的な介護だけでなく、買い物、料理、洗濯などの家事、さらには病気の両親や幼い兄弟の世話、精神的に不安定な家族への励ましなど、感情面の支えにまで及ぶ。

○マミ 幻聴・妄想というものが、母にものすごい不安をもたらしていて、その不安が私にまですご

く影響してたなというふうに思います。外はもうめちゃくちゃで危ないから、外には出てはいけないみたいな感じで、学校すらもたびたび、今日は行かなくていいからねって、勝手に休まされるみたいな日とかが結構あって。

○ナレーター その後、母親が入院して一時は落ち着いたが、大学生になると、母親のケアを巡って親戚間の意見の調整役となり、頼られることで素直に気持ちを出せなくなった。今も対人不安や摂食障害を抱え、カウンセリングに通っている。

○濱島准教授 こちらが2016年に大阪府の公立高校10校、約5,000人の高校生を対象として行った調査票の一部なのですが、一部の調査票になってきます。

○ナレーター 専門家が行った大阪府立高校の生徒への調査では、介護を担う子供たちは5.2%、およそ20人に1人。クラスに1人以上いる計算になる。学校がある日は4時間以上、休みの日は8時間以上と、過酷な介護やケアに当たる生徒の存在が示された。

○濱島准教授 ヤングケアラーたちの抱える問題として、よく指摘されるものとして、まずは学校生活への影響で、やはりケアをしている中で通学ができなくなったり、欠席が増えたり、また、成績が落ちてくる。やはり家でゆっくり勉強することができなかつたりしますので、生涯にわたった影響が非常に大きくなるというのが特徴としてあると思います。

○ナレーター マミさんは、ケアラーという自覚がないまま母親のケアに当たってきた。精神疾患に対する偏見への恐れもあり、SOSを出せなかった。

○マミ 何となく家のそういう暗い事情みたいなのをあまり周りに知られたくない、恥ずかしいというのがあって。それが先生、大人であっても、何かそういう感情を抱いていました。

○ナレーター 小学生や中学生といった低年齢から始まるケアラーをどのように見つけ、支援につなげるのか。スクールソーシャルワーカーの長田美智留さん。ヤングケアラーの児童・生徒がいないか、常に子供のささいな言動に目を配っている。

○長田 大体の子が、すごい苦しいというよりも、何かもつとできたらいいのに、できない。ママが心配、パパが心配という、そういう発信をする子供が多いですね。

○中学教師（男性） では、始めさせていただきます。お願いいたします。ではまず、この生徒の状況について調査票を基にして。

○ナレーター 家族のために家事を担っている可能性のある1人の中学生がいた。今の状況から抜け出すために、学校側と共に支援策の検討を始める。調査票を基に生徒が置かれる家族関係を探っていく。家族に何度も接触を図ろうとするも実現せず、このままでは孤立する可能性が高い。

○長田 目標は、卒業するまでに家族以外の大人か機関と、この子がつながれるようなことが最終的には目標になりますよね。この子がこの家族の中で誰かがサポートするという時代は多分終わっていて、この子はこの子なりに、外の人とつながって、外の人と一緒に育ちをサポートしてもらって。

○ナレーター 目を配るのは子供だけではない。学校に届けたのは、親への差し入れ。親への支援が子供への支援にもつながるためだ。

大切なのは、子供が楽しみを見つけたり、家族以外の大人と関わったり、子供が自由に生きる環境を守ること。

○長田 子供って本来、外に向かっていく力とか、やりたいことみたいなのをみつける、何か天才みたいなところがあると思うけど、なかなか追い詰められたというか、重圧を感じている子供って、そ

れが感じられなかったり、気づかなかったり。ぜひそういうときに、「困ってないの。」とか「何か苦しくない。」とか聞き出すというか、引き出す。そんなことができたらすごくいいなど。

○ナレーター 埼玉県では去年、全国で初めて介護者を支援するための条例を施行し、SNSなどを活用した相談窓口の整備を進める方針だ。また、政府も支援策をまとめるため、初めてとなるヤングケアラーの実態調査に乗り出した。

統合失調症の母親のケアをしてきたマミさん。大学院生になって、去年の春から一人暮らしを始めた。子供の頃からケアをしてきたことによる対人不安と向き合っている。母親と離れた今でも、薬の管理を手伝うという形で母親のケアは続いている。

○マミ 多分、私ぐらいしか話し相手もいないだろうなとも、すごい思うんですけど。そんなに、すごいいっぱい突っ込んで聞いてくるとか全然なくて。母は母の人生なんやろうなっていう感じで。そこまで私が考えることじゃないのかもなって、すごい思います。自分の人生に意識を向けたいなとか、すごい思います。

○井上教育長 終わりです。

これは一例として、読売テレビで放送されたものです。先ほども話しましたがけれども、県の総合教育会議でもテーマになっているということで、教育委員会と福祉部局、いわゆる知事部局の連携がなくして解決できないというようなテーマとして挙げられたのかなと私は思うのですけれども。このヤングケアラー等の実態と、さきほどのパーセントからいっても、少なくはないのではないかとは思いますが。

松田委員、民生委員という仕事もされてきているのですけれども、どうですか。このヤングケアラーについて。

○松田委員 ビデオの中でも、ヤングケアラー自身が自覚がないですとか、困っていてもSOSを出せない、あと、周りにやはり知られたくない、隠したいというか、知られるのが恥ずかしいという思いもある。すごくナイーブな問題なので、よっぽどこちらがアンテナを高くしていても、気づけないのではないかなというところがあるなという。本当に難しい問題だなと思います。

ただ、もし身近にそういう人がいるとか、そういう子供がいるなら、すごく助けたいという大人もいると思うので、そこは何かうまくやらないと。気づいてあげられるところと、「助けて」が言いやすい社会になればいいなと思います。

○井上教育長 川嶋委員、いかがですか。

○川嶋委員 とてもデリケートなというか、難しい問題だなと思います。最初にこの議題を頂いたときに、私、横文字にちょっと弱い、よく分からないので、「ヤングケアラー」って見たときに全く分からなかったのですが。でも、そのヤングケアラーとは何ぞやとちょっと調べてみたときに、ああ、でもこういうことは昔から、あったはあったよねということで、そこから考え始めたのですけれども。

本当にいろいろ考えたのですけれども、さきほどのビデオの中に出ていた新潟市の教育委員会のスクールソーシャルワーカーの方のメッセージを聞いたときに、ふと思ったのですけれども、各市だと各校にスクールカウンセラーが配置されているのですけれども、今そのインタビューに答えられていた方は、スクールソーシャルワーカーという方がいて、結局のところ、相談を受けて、そして、さら

にその先がないわけなんですね、例えば当市ですと。だから、そのスクールソーシャルワーカーを入れることによって、関係機関との連携とか調整とかを行う必要が絶対的に出てくるということがあるので、これ、予算はあることと思うのですけれども、白井市にもスクールソーシャルワーカーを入れていただけたら、かなりこれはいい仕組みができるのではないかなと思います。

以上です。

○井上教育長 ありがとうございます。

スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーというお話が出て、つい先日、スクールカウンセラーは小学校に全校配置と千葉県はなっていて、スクールソーシャルワーカーの配置もあるわけですが、少ないような状況です。

和地部長、ざっとでいいのですけれども、その辺の配置状況的なものありますか。

○和地教育部長 スクールソーシャルワーカーは、市には配置されていないのですけれども、今、千葉県内には5事務所ありますので、そこにそれぞれ配置されていて、必要に応じて学校からの相談に応じて、そこから派遣されて、より細かい指示・助言をしていただけたら、今後の見通しについて話し合ったり、そんな形で活用されております。

以上です。

○井上教育長 ありがとうございます。

五つの教育事務所が千葉県にあって、そこに1人、だから全体で5人ということですね。ですから、うちは北総教育事務所管内なので、そこに1人で。予算の絡みがありますからね。

○川嶋委員 予算がと言っていたら、結局は何も進まないわけで、そこはもう答えから、解決のほうから見つけていかないと、入り口ばかり掘り下げていても仕方がないのかなと思うので、ぜひここは当市でスクールソーシャルワーカーを配置というところをお願いしたい。

○井上教育長 市長も、最初のときにお話されましたけれども、殺人という、そういう現象に最近、さきほどの大津の件もそうですし、そういうのがぼつぼつ何件か続くような感じになって、このテーマもかなり浮かび上がってきているのかなというようにあるのですけれども。このスクールソーシャルワーカーは、さきほどのビデオで見ると、かなり活躍はしている感じでしたね、あそこでは。

○笠井市長 このテーマのときに、自分でいろいろな事例なり、国の補助制度をちょっと調べてみたのですが、これは令和3年9月14日で、ヤングケアラーの支援に関する令和4年度概算要求等についてということで国から出しているものがありまして。この中に、各市町村にも出せる補助金が、内容が入っています。自分がここでオーケーしてしまうと、皆さんすぐに動いてしまいますが、こういうものを活用しながら、これから進めていければと思います。

職員に今これを言っているのは、こういう補助金がありますと。こういう補助金の中で、一つは、ヤングケアラーの実態調査研修推進事業というのがございます。これは、令和4年度の概算要求で364億円、国が財務省のほうに予算要求している中に、市町村1か所当たり297万7,000円というようなことの補助金があって、負担割合が国が2分の1、実施負担が2分の1というのがあります。まずこの問題をやるときには、実態が分からないで人を配置しても仕方がないですから、まず実態と、一方では研修をやって、こういうものが該当しているのですよということをやることが基本ではないかと思えます。

ですから、自分がこうしてこんなことを言ってしまうと、職員がプレッシャーになるところですが、まず、この中身の研修、費用は国が概算要求していますので、ここを少し勉強してもらって、これが本当に白井市にとって有効でしたら、考えていただきたいというふうに思います。

ここで自分に振られちゃうと、職員プレッシャーだと思うんですよ。

○井上教育長 もちろんそうです。

○笠井市長 ただ、こういう補助金があるので、中身をちょっと調べてもらって。もし、白井にとって有効だったら、また考えていただければと思います。

○井上教育長 ありがとうございます。

さきほども言いましたけれども、市長部局と教育委員部局の連携が、とにかく非常に必要だということが大事なので、どちらかだけでも進めたいなという感じはしますよね。

○笠井市長 おっしゃるとおりで、さっき自分も一番初めに、5番目に話をしました大津の事例。これは、根底にはヤングケアラーという問題が起きて、結果的に殺人まで行ってしまいましたので、私が冒頭に言ったように、命というものをやっぱり大事にしたい。このためにはどうするかということは、行政として考えていきたいと思っています。

○井上教育長 ありがとうございます。

教育部門と福祉部門と市長部門との連携となると、話題が全然変わってしまうのかもしれないですけども、これからできそうな、こども庁。教育と厚生労働が一体化するのか、どうですかね。

○笠井市長 多分そういうものが、ある程度、子供に特化したものの政策の横串が多分やって来るのではないかと考えています。子供関連ですね。

今までは、例えば、厚生労働省だけがやっていたとか、文部科学省だけがやっていた、これをあらゆる施策をこども庁に集約をして、そして、総合的に対策が取られるのではないかと考えています。そうでなければ、こども庁の意味がないと思いますので。そこは、やはり市としてもアンテナを張って、どのような施策が総合的にやれるかということは、注視をして見ていきたいと思っています。

○井上教育長 市長、こども庁は、まずできる。

○笠井市長 もうできると思います。細かい政治のことはちょっと分からないのですが、できると思いますよ。

○井上教育長 僕が以前仕事でいろいろな教育委員会を回っていたときに、酒々井町は、こども課というのがあって、大分前からですが、例えば学童と放課後子ども教室をもうすでに一緒にやっているわけです。十数年前から、こども課でそういうのを全部まとめて、子供のことは、学童も保育園も幼稚園も学校も全部一緒にやるみたいな流れになっていて、そのときはすごいなと思っていました。こども庁ができるんだとなったときに、思わず酒々井町を思い出しました。

ヤングケアラーをちょっと広げて、子どもの貧困というようなことについて、どうですか。

中里さんは、どうですか。

○中里委員 まず、ケアラーに関しては、私もちょっと教育系なので、先生側からすると、子供の教育はできても、親の教育はできない。しかも、その生徒・児童の教育というのは、24時間のうちのたった5時間、8時間しかできないというので、先生側の立場からすると、本当はこの子もっと伸びるとか、いろいろな部分があって、すごくもどかしいというのが現場だと思うんです。だから、その

ためには、現場だけではできないことをこういう機会を使って、どうやって持っていったらいいとか。

まずは子供のケア。それは、さっき言ったようにスクールソーシャルワーカーであり、そういうのを取り入れてどんどんやっていくのが緊急処理であって。でも、長い目で見ると、その大本をどうしても絶たなければいけない。直さなければいけない。これは、いろいろな考えがあって難しいのですけれども。

例えば、介護するには、お金がかかる。だから自分の親を孫にさせるとか、いろいろなパターンがあると思うんです。ただ、そうやってしまっている親たちというのは、昭和から平成になる頃に、親と同居するのは嫌だ。核家族がいいといって、結婚して、同居しないで離れて、そこで子供を産んで。でも、昔は、じいちゃんばあちゃん、どっちか義理でも、いれば、赤ちゃんはこうやって育てるんだよとか、いろいろな知恵を授けてくれて、どうにか子育てをやっていけたのに、核家族になって子育てできない。親は不安になって。すごいマイナス、マイナスになっていると思うんです。

結局、そうやって同居しない親が、今度は年を取ってきて。でも、それを施設に入れるお金がないから、じゃあ、自分の子供たちをその介護に当てちゃえ。自分たち親は、現役でバリバリ働いているから、仕事があるからという理由。ただ、その中には、親を看たくない。まして、子供をつくったのはいいけど、子供の育て方が分からない。逆に、育てるのが嫌な人が、共働きになるというパターンも今すごいあると思うんです。それが、結局、子どもの貧困につながって、それは金銭であっても心の面でも、全ての面でそうなっちゃっているのかなと思います。なので、それをどうにかして直そうというのは、すごい根本的なもので難しくて。

さらに考えたのが、じゃあ、親の収入が増えればいいの。税金下げて親の収入が増えれば、じいちゃんばあちゃん、老人ホームに入れられて。でも、そういうわけでもない。

実際、うち、幼稚園・保育園関係ですけれども、幼稚園児・保育園児の制服ってすごく高いんです。多分、学生服より高い。なので、今の親って、幼稚園に入って、一番上の子はしようがないんですけれども、横のつながりがすごくて、あの子が卒園するとか分かったら、それを普通にもらったりして、すごいお古を着せているんです。バザーがあれば、それで買う。そういうことをしながら、でも、その親の人って、化粧ばっちりとか、スマホが1年もしない、すぐ変わるとかという方も多々いるんです。

なので、本当にお金がないから、子供が貧困なのか。それとも、親の都合で貧困なのか。すごく難しくつながっていて、でも、それって何が悪いの。新しいスマホが出なければいい。新しいものが出なければいい。どうしても人間が楽をすればするほど、自然破壊・環境破壊。それがさきほどの初めのSDGsにつながる。だから、人間が楽をしないで、ちょっと苦労するぐらいでやっていくと、ちょっと昔のいい具合に戻るのではないかという考え方もできる。

○井上教育長 ありがとうございます。

○井上教育長 市長、何かありますか。

○笠井市長 言っていることは分かる。けれども、どうしても行政として救わなくてはいけない人たちもいるわけですね。幾ら自分が努力しても、どうしても、人の手がないといけない。この人たちをどうするかだと思います。基本的には、言っていることは分かります。自分でそれをうまく頑張って、皆さん、それで頑張っているわけけれども、でも、それができない人がいるので、そこをどう

やって行政として助けてあげるか。ここだと思っています。

以上です。

○井上教育長 ありがとうございます。

テーマが「子どもの貧困」となっているので、中里さんのいう、貧困だけが原因ではないことも結構あるのですよね。そういう御指摘だと思います。

保護司もやられている齊藤さん。こういう問題はいかがですか。

○齊藤委員 なかなか日本のこういった話は事件とかならなないと、こういうものがクローズアップされないというのが、日本の実情です。

今、私が保護司としてやっているのは、この後のことになりますのであれなのですが、起こってしまう前にどうやめさせるような方向というのは、なかなか難しい。まして、こういうヤングケアラーって、昨日今日始まった問題ではないと思うんですね。先ほど市長から、こういった制度があるんだよということがありますけれども、実態把握というのがあると、行政だけではなかなか難しいというのがありますので、ここはいつも市長が言っている3本柱の自助、公助、共助。このうちの多分、自助だと思うんですね。近所の人たちの目、聞き込みではないですけども、そういうところからもいろいろな情報を集めてきて、学校の先生方と相談したりして、こういった問題をまず実態がどんなものかあるというのを把握していかないと解決策の糸口にはならないのかなと私、ちょっと聞いていて思っていたんですね。

「子どもの貧困」なので、さっき中里委員もおっしゃっていましたが、親が楽しんでやるのが、子供に対して貧困になってしまうのかということもありますが、このヤングケアラーって、さっきのビデオも見ていたのですけれども、パパが大切だから、ママが大切だから、そういう子供たちが親に対してすごい優しさがあって、学校へ行かなくてもいいからみたいな感じで家事をやってしまうと、で、勉強が遅れてしまうということなので、根が深い、すごく難しい問題。昔からある問題だと思うので。でも、ここでクローズアップしたのは、やっぱりこの殺人が起きてしまったから、ここで何とかという話になってきたのかなとは思いますが。

なので、自治体がどこまでできるのかと、それと、あとは市民がどれだけそこに参加して、協力しなくちゃいけないのかなというのが、一番の解決策になるのかなと、私はちょっと思いました。

○井上教育長 ありがとうございます。

私もいろいろなビデオを見ている中で、イギリスがこのヤングケアラーの支援について、報道では最も進んでいると、ある番組があったのですけれども、内容としては、ヤングケアラーであることを誇りに思っているという。イギリスの子供たちはですね。大変だけど、誇りを持っているという、そういうようなまとめ方をしていたビデオもありましたけれども、なかなか難しい問題です。

それでは、今日は三つのテーマで話をしましたけれども、何か漏れ落ちているようなことがありましたら。

よろしいですか。

〔「はい」と言う者あり〕

○井上教育長 ありがとうございました。

それでは、この三つのテーマを終わりにして、4のその他に進みたいと思います。

4、何かございますか。

事務局からは、ありますか。

○事務局 事務局から1点連絡させてください。

次回の予定ですが、今のところ2月頃を予定しております。現時点ではあくまで予定なのですが、小中学校のICTの状況、また、白井市の文化、文化財についてを現時点では予定しております。

以上です。

○井上教育長 ありがとうございます。

それでは、笠井市長にお戻しします。よろしく申し上げます。

○笠井市長 井上教育長、各委員の皆さん、ありがとうございました。

今日のテーマというのは、非常にこれから重いというか、これから対応しなければいけないテーマだと思っております。いろいろな意見がございましたが、それを少しでも参考にしながら、行政として、本当に困っている人たちにどういう支援ができるのか、どういう応援ができるのかを考えていきたいと思っております。

行政も万能ではありません。決められた財源、決められたマンパワー、この中で何を一番優先的にやっていくか、これを考えながら進めていきたいと思っておりますので、今後とも皆さんには、本当に忌憚のない意見、現場の意見、専門家としての意見を聞かせていただいて、そして、市の教育施策に生かしていきたいと思っておりますので、今日は本当にどうもありがとうございました。

○事務局 それでは、本日は、長時間にわたりまして貴重な御意見を頂きましてありがとうございました。

以上をもちまして、令和3年度第1回白井市総合教育会議を終了いたします。

皆様、どうもお疲れさまでした。

午後3時31分閉会